The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗武の歌論における朱子学の影響
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1957, 19, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗武の歌論における朱子学の影響

宇佐美喜三八

一

田安宗武の歌論に漢学思想の影響が見られるといふことは、すでに人々によって注意せられてゐる所である。然しその問題は従来かなり漠然と顧みられて来た傾向があって、特にそれに重点を置いた研究は未だなされてゐないやうである。わたくしはかつて本誌の第十三輯で、在満の歌論における堀川学の影響について論じ、その際宗武の歌論に朱子学の影響のあることを一言した。それで今ここに、宗武の歌論における朱子学の影響といふ問題を取り上げて、実証的な立場から考察を試みようと思ふのである。

「国歌八論」を契機として書かれた宗武の歌論は、真淵が出仕する以前に成立したもので、それらの歌論に真淵の思想からの影響はないといってよいであらう。そこに力強く働きかけてゐるのは儒学の思想であり、朱子学の思想であったといふことができる。「国歌八論」をめぐって、在満と宗武との間になされた論争には、古義学の思想と朱子学の思想との対決といふべき性格が見られ、宗武と真淵との間に交された論弁には、朱子学派と古文辞学派との討論といふべき色彩が認められる。宗武の歌論における朱子学の影響は、宗武の歌論を究める上でも、「国歌八論」に関する論争を考へる上でも、看過し難い問題であるといはなければならないのである。

宗武の朱子学の教養は、室鳩巣の感化に負ふ所が大きかったのではないかと思はれる。周知の通り、鳩巣は朱子学を信奉して、名教維持の精神に富んだ篤実な学者であった。吉宗に深く信頼せられて機密の相談にも与り、その頃すでに一代の宿儒として重んぜられてゐた。「有徳院殿御実紀」の記事によると、享保十年十二月十一日宗武の兄で後に将軍となった家重の侍講を仰せつけられてゐる。宗武はそれから二年の後、享保十二年十三歳の時から、白石の門人であった土肥霞洲に学んだ旨「田藩事実」に伝へてゐるが、家重の教育を委嘱せられて若君の輔導役となった鳩巣が、宗武の教育について全然無関係であったとは思はれない。宗武の歌論には、朱子学の影響とは別の問題として鳩巣の思想との交渉を考へ得る所がある。それに関しては、他日機を得たならば述べてみたいと思ってゐる。

寛保三年仲冬、二十九歳の時、宗武は「誨蒙近言」と題する文を草した(註一)。その末に宗武は「右の一章は童蒙の輩の学業を勧めんが為に記せし所也」といひ、左右近習の人を始めその子弟も少くない旨を述べて、「それらの人々、苟も道を学ぶの心なからんは、

誠に本意なき事なれば、只其志を起さしめん為に妄に浅近の言を著と云爾」と記してゐる。即ち、学問の奨励により家中の士風を振作しようとする意図をもって書かれたものであった。その内容は、先づ天地の間において人の貴い理由は人の道を知ることに在ると論じて、道を学ぶべき所以を論し、次に士農工商四等の中で士を貴ぶべき理由を述べ、士たる者の職分として修身斉家、治国平天下のことを説き、更にその職分のために知を致し物に格るといふ「大学」の教へを示して、致知格物の至大なるものは学問であるといひ、士たる者は学問をせずしてはその職分をなし得ざることを力説してゐるのである。その中で注意せられるのは、「扨其人の道といふは五倫也、五倫とは父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信是也」と述べて、五倫を尊ぶべきことを強調してゐることである。この五倫を論じた部分は全文の三割近くの分量を占めてゐて宗武が如何に五倫を重んじてゐたかが知られるのであるが、このやうに五倫の尊重を強調してゐるのは、鳩巣の「五倫名義」から受けた感化に基づく所も大きいものと思はれる。「五倫名義」は享保八年十一月、鳩巣が吉宗の命により書いて奉ったもので、吉宗はこれを同年十二月同じく鳩巣に奉らしめた「五常名義」とともに、家重に座右の書として遺はした(註二)。宗武もまた「五倫名義」を与えられたに相違ない。また「誨蒙近言」の中には、「人の道は則天理と同じ」といふ言葉もあって、宗武が朱子学の思想を信奉してゐることは明らかであり、士の職分を説いて学問を奨励してゐる言葉はまったく「大学」に拠っていて、宗武自身も「是則大学の教へなり」と述べてゐる。「大学」を尊び致知格物を修身斉家の基礎とするのは朱子学の思想である(註三)。要するに「誨蒙近言」一篇は、朱子学派の儒学思想をもって学問の必要を論し、士風の昂揚を図らうとしたもので、朱子学に基づいて名教の維持を念願した鳩巣の精神に通ずる誨言であるといふことができる。

「誨蒙近言」に見られる鳩巣的な朱子学の思想は、宗武の歌論の成立を考察するに当っても注意すべき意義を有する。「誨蒙近言」が書かれたのは、前記のやうに寛保三年であって、在満が「国歌八論」を書いたのは、その前年の寛保二年であった。宗武の「国歌八論余言」はやはり寛保二年に書いたものと考へられ、「臆説剰言」は「誨蒙近言」を書いた翌年の延享元年に成り、「歌論」はその後に書かれたものである。「国歌八論」をめぐる宗武の歌論は、彼が「誨蒙近言」を書いた寛保三年を中に挟んで、その前後の年に成立したのであった。「誨蒙近言」一篇に見られる旺盛な儒教精神を思へば、宗武の歌論に儒学の影響の強く現はれてゐるのは敢へて怪しむに足りない現象であり、またその歌論を支へるのが、名教保持の精神に貫かれた鳩巣的な朱子学の思想であることも理解せられるであらう。

註一、土岐善麿氏著「田安宗武」第二冊、解題二参照。
註二、「有徳院殿御実紀」附録巻十。
註三、西晋一郎氏著「東洋倫理」二四九頁参照。

二

宗武の歌論において朱子学の思想の影響として先づ注意せられるのは、宗武が歌に「理り」と「わざ」(事・業)とがあると考へてゐることである。彼は「余言」の歌のみなもとの論の中で、

諸々の道みな理りとわざとの侍るなり。歌の道もまた然り。よ

くよく辨ふべきことなり。

と述べてゐる。「理り」と「わざ」とは諸道にことごとくあるもので、歌の道においても同様であるといふのであって、この考へ方は理気二元論の影響を受けた思想であると見なさければならないと考へる。周知の如く、朱子は「天地之間有レ理有レ気。理也者形而上之道也。生レ物之本也。気也者形而下之器也。生レ物之具也」（朱子文集・巻五八）と論じてゐるやうに、現象界を理気二元をもって説明した。宗武が「理り」といふのは理にあたり、「わざ」といふのは気にあたるものである。この宗武の思想を在満が「再論」の中で、堀川学派的な立場から、「臣愚いまだ甘心し奉る事あたはず」、「聖教すべて理りをのたまへる事をしり侍らず」などと言って批判したのに対し、宗武が「歌論」で反駁した論述の中には、次のやうな言葉が見える。

それ陰陽の消長、日月の往来を始として、天地の間万物皆其理あらざるはなし。たとへば人は物也。人の日々に行ふ所は事也。そのおこなふ所、或は君につかへて忠となり親に事へて孝となる。すべて其心より出づる、是を道といふ。有レ物必有レ則と見えし則とは即ち理也、性也、命也。已に得たる全体をさしては心といひ、事に応ずる大用をさしては道といふ。其名は異なるに似たれど、その実は一也。然るに近世異説の徒性理の名を厭ひ、つひに事のみにして理の有る事をしらず、又は聖経理を説き玉ひしを見ずなどいへる、いと心得がたし。

万物皆その理のあらざるはなきを言ひ、人と忠・孝との問題を例にして、心・道・性・命などを論じてゐるのは、朱子学の思想を基盤としたものである。朱子は「大学章句」伝之五章に記した文中で「天下之物、莫レ不レ有レ理」と述べてゐる。その思想に立って宗武は例を挙げ、人は物であるとして、人について忠・孝のことを言ってゐるが、鳩巣の「大学章句新疏」伝之五章には、「君臣父子物也。即二君臣一而窮二仁忠之理一。即二父子一而窮二慈孝之理一」と説明がある。「すべて其心より出づる、是を道といふ」といったのは、「中庸」の「率レ性之謂レ道」や朱子の「中庸章句」第一章の註に、「道者。日用事物当レ行之理。皆性之徳。而具二於心一」などに関係を持つ思想であらう。宗武は忠・孝が臣・子の当に行ふべき理であることを説いたものと思はれる。

「有レ物必有レ則」は、「詩経」大雅の烝民の「天生二烝民一。有レ物有レ則」に基づいた語で、この詩句は朱子も「大学或問」で引用してゐるが、「大学或問」に「凡有二一物一必有二一理一」とが「物必有理」などという言葉もあることを思えば、「有レ物有レ則」の則は理の意味にもなるであらう。鳩巣は上記の朱子の語「天下之物。莫レ不レ有レ理」の意味を、「大学章句新疏」で「有レ物有レ則也」と解してゐる。則がそのやうに理であるとともに、性であり命であるといふのは、朱子が「中庸章句」第一章で「性即理也」と説き、また「中庸或問」で「蓋在レ天在レ人。雖レ有二性命之分一。而其理則未二嘗不レ一」と論じ、「朱子語類」巻四で「中庸に見える「天命」の命は理を言ったものであると述べてゐるのに通ずる思想である。さうして「己に得たる全体をさしては心といひ、事に応ずる大用をさしては道といふ」と言って、心と道とは名を異にしてその実が一つであると述べてゐるのも、やはり上記の「中庸章句」第一章の朱子の註「道者日用事物当レ行之理。皆性之徳。而具二於心一」と関係のある思想である。鳩巣は「中庸章句新疏」でこの朱子の註について、「其曰二

日用事物当レ行之理。則指二其用一。以見二人之不レ離二於道一。其曰二皆性之徳而具一於心一。則本二其体一而言レ之。以見二道之不レ離二於人一」と述べ、また「凡事物当行之理。莫レ非二性分固有之徳。而其全体則心之所レ具也」と説いてをり、宗武の言ふ所はこの思想に通ずるものであらう。「全体大用」といふ語は、「大学章句」伝之五章の朱子の文にも「吾心之全体大用無レ不レ明矣」と見え、また鳩巣の「駿台雑話」巻一にも、「道に全体大用あるをしらぬも理ぞかし」と見えてゐる。

「近世異説の徒性理の名を厭ひ、云々」と言って在満の考へを非難してゐるのも、鳩巣が「駿台雑話」巻一で、異説をあげ「理気体用などの説、孔孟の言及ばざるといふに拠って朱子を議するあり。云々」と言って、堀川学派の思想を排斥したのと同様の態度である。宗武はこのやうに朱子学の思想によって物には必ず理のあるべきことを主張し、「聖経すべて理りをのたまへる事をしり侍らず」(再論)と道破した在満に応酬したのであった。さうして彼は、歌にも「理り」と「わざ」とがあるべきことを説いたのである。

三

宗武が歌の「理り」といひ歌の「わざ」といふのは、具体的に如何なることを意味するのであらうか。それらの意味する所について、宗武は正面から説明をしてゐないのであるが、彼の歌論を読めば、それらが何を指してゐるかはおほよそ推察することができると考へる。

先づ「理り」に関しては、「臆説剰言」の中に次の如く述べてゐるのを見て、その意味する所を知るべきであらう。

ことさら医道などは、すでに神農黄帝の心に基づきて、万民の患を救ふの要務なれば、上も下も其すぢをかねて心得ん事こそ願はしからめ。歌の道はさらなり、性情を和らげ風紀を助くる物なれば、いかで疎かにすべき。只上も下も歌学などいふ事に拘らず、その理りのままに大様によみ出で、その詞などに至りては、誠に歌の道しれる人に正さしめんこそ本意なるべき。

これによると、宗武は歌は性情を和らげ風紀を助けるべきものと考へて、そうした効用を発揮すべき歌の本質的な精神といふものを想定し、これを歌の「理り」と呼んだのであると解せられる。それは名教保持の念願の強かった宗武独自の見解による和歌の本質を指したものといふことができる。次に歌の「わざ」(業)の意味する所や、「理り」と「わざ」との関係については、「歌論」の中の左の言葉によって知られる。

歌は性情より出づる所なれば、心正しき時は歌もまた正し。しかれども業ならざる時は、句つづきの如きに至りてはよからざる事あり。是かの歌の理りは得たれども歌の業ならざるなり。又心は邪なるものも歌の業に達しぬれば、心正しき人のよみたるが如くなる歌をよむべし。さらばその歌をばとりて教へとすべけれど、その人は歌の道にはかなはざる也。これかの歌のわざ得たれども理りはたがひたる也。

これを見れば歌の「わざ」といふのは、歌の表現の技法を意味することが明らかであり、歌の理りは正しい心に基づかなれば得られないものであるが、わざは心の正邪に関係のないものとしてゐるのである。歌の理りを得てゐてもわざを得てゐない人もあり、またその逆の人もあるといふことは、すでに「余言」(歌の道盛んなる世

と廃れたる世とをわきまふる論）においても述べてゐる。更にまたそこで、

この道にも理りとわざとのはべるなり。されば、両つながら全からでは、歌の道とは、いひ難かるべし。

といってゐて、宗武が理りとわざとを共に得た歌を理想としてゐることは言ふまでもない。

然し宗武は前引の「臆説剰言」の文中で、歌学などには拘泥せずその理りのまま大様によみ出で、詞などは歌の道を弁へてゐる人に正さしめるのが本意であると論じてゐるやうに、一般の人々は、わざよりも理りを重んずべきであるといふ思想を抱いてゐたのであった。さうして歌の理りである「性情を和らげ風紀を助くる」本質的な効用の中でも、風紀を助ける方面を特に重要視したのである。「余言」では「政正しき御代は、歌の理り盛んなるべく、政衰ふる御代は、歌の理りも違ひぬべし」と言ひ、また、

その理り盛んなりける代、或はその理り得たる人たちを知らんことは、今の教へともなりなん。そのわざ巧みなりける人などは、知りても益なし。

と論じ、古歌に関してわざよりも理りを重んじ、「今の教へ」となるべきことを貴んでゐる。そこで注意しなければならないのは、宗武の歌が風紀を助けるといふ考へは、歌が性情を和らげるという考へと同じく、儒教の音楽思想の感化に因ることも認められるのであるが、それに関聯して宗武が「今の教へ」とか、「教へとなりぬべき古歌」（臆説剰言）とか、「教へとすべき歌」（同上）とかいって、歌の「教へ」を尊重してゐる所には、朱子学の思想の感化があると見なされることである。この点は宗武の歌論における朱子学の影響として、理りとわざとの問題に次いで取り上ぐべき問題となるであらう。

四

宗武は和歌の風教上の効用を極めて積極的に認めたのであった。彼は「歌論」において、

歌の道人の心より起りて以て勧善懲悪の教とする所なれば、…

と言ってゐる。和歌が勧善懲悪の教へになるとする見解は、朱子学派の詩に対する思想に基づいたものである。宗武の主張に抗議して詩に関し、在満が「宋儒の言には、詩は従来の物なれども、是によりて勧善懲悪すべく、聖人も取り給ふと見えたり」（再論）といひ、真淵が「さて宋儒にいたりて専ら理をもてこれを説き、ひとへに勧善懲悪の為とす」（再奉答書）といってゐるのは、朱子が「詩経」の詩に対して抱いた思想を指したものと見られる。朱子は「詩集伝」序で詩の教へとなる所以を説いて、

詩者人心之感レ物。而形二於言一之余也。心之所レ感有二邪正一。故言之所レ形有二是非一。惟聖人在レ上。則其所レ感者無レ不レ正。而其言皆足二以為一教。其或感レ之之雑。而所レ発不レ能レ無二可レ択者一。則上之人必思レ所二以自反一。而因有二以勤二懲之一。是亦所二以為一教也。

と述べてゐる。宗武が「歌体約言」で、歌は人の心を種として詠み出だすものとして、

すなほなる人は歌のこころもすなほに、あるはかたくなにあるはたはれたるは、うたにもその色のあらはるるなり。

といっているのは、右の心の邪正が言葉の是非に現はれるという説に拠ったものであらうが、上記の如く、歌の道は人の心から起って

勧善懲悪の教へとする所であると考へたのも、やはり右の朱子の詩教よりの影響に他ならないのである。

宗武はまた「余言」において、「うるはしき歌は人のたすけとなり、あしき歌は人をそこなふ」と言ってゐる。それは前文との関係から見て、儒教の音楽思想の影響とすべきであるが、続いて、

されどまたあしき歌をもて、これはあしと思ひて見るときは、また誡めともなるなり。

と述べてゐるのは、朱子の詩教からの影響であると認めなければならない。悪い詩が戒めになるといふ思想は、右の「詩集伝」序にも見られる所であり、朱子は、「論語」(為政)にある「詩三百。一言以蔽之。曰思無邪」という孔子の言について、「集註」で、

凡詩之言。善者可以感発人之善心。悪者可以懲創人之逸志。其用帰於使人得其性之正而已。

と説いてゐる。更に李茂欽に答へた言葉の中にも、「如詩中所言有善有悪。聖人両存之。善可勧。悪可戒」(朱子語類巻八十)と見えてゐるのである。「論語」の「思無邪」を朱子流に解する弊として、教訓的な詩でなければ詩でないといふ偏狭な詩観を生じたことは、すでに鈴木博士も論じてをられる(註)。宗武はその偏狭な詩観をもって和歌を律したのであった。右の宗武の文で歌といふのは、音楽の要素としての歌であるが、主として歌詞を意味することは宗武の述べてゐる所である。

宗武は朱子の詩教を適用して悪い歌も戒めになると論じ、更に、

されば雅楽廃れて後も、聖なほ詩経といふふみを撰ばせたまひて、人を導きたまふなり。

といって、「詩経」の撰ばれた趣旨を述べてゐる。これも朱子の言ふ所に基づいたもので、「詩集伝」序には前引の文に続き次のやうに見える。

昔周盛時。上自郊廟朝廷。而下達於郷党閭巷。其言粋然無不出於正者。聖人固已協之声律。而用之郷人。用邦国。以化天下。至於列国之詩。則天子巡守。亦必陳而観之。以行黜陟之典。降自昭穆而後。寖以陵夷。至於東遷。而遂廃不講矣。孔子生於其時。既不得位。無以行勧懲黜陟之政。於是。特挙其籍而討論之。去其重複。正其紛乱。而其善之不足以為法。悪之不足以為戒者。則亦刊而去之。以従簡約。示久遠。使夫学者。即是而有以考其得失。善者師之。而悪者改焉。是以。其政雖不足以行於一時。而其教実被於万世。是則詩之所以為教者然也。

雅楽が廃れて後も聖人は「詩経」といふ書を撰び、勧善懲悪の教えを示して人を導いたといふ宗武の言葉は、結局右の朱子の文の要旨を述べたものであった。

在満は「再論」で、右のやうに朱子の思想に拠った宗武の言葉を評して、歌に限らず何事にせよ勧善懲悪の義の附会せられないものはなく、教誡の端とならないものはないが、歌は本来教誡のためのものではないと述べ、詩もまた同様であって、聖人が詩を採ったのは勧懲のためではなく、人性に通ずるため、或は多く鳥獣草木の名を知るためであると講じ、詩の勧懲の用を説く朱子の見解に反対した。これに対し宗武は「歌論」において、在満の批評を「是ぞ誠にかの佞者を悪むとの玉ひしたぐひなるべし」と言って斥け、詩は聖人が勧懲のために採ったものであるといふことを飽くまで主張してゐる。勧善懲悪の効用は万事にあるとしても、身近なものが無難で

あると論じて、「詩は人情にしたしき物なれば、勧善懲悪の道において、是を以て人の心をやはらげただし玉ふなるべし」と言ひ、また聖人刪詩の主旨は勧懲にあって、草木鳥獣の名を知ることなどは「詩の益の一端なれども、かばかりの事までにも益あるとのたまへるなるべし」と言ひ、更に人情に通達することは極めて重大事であるとして、「人情に通達して、そのよき所をとり用ふれば則ち聖なるべし」と言ひ、在満の詩についての論を反駁して余す所がなかった。さうして、

聖人の人を教へ玉ふには、興於詩立於礼成於楽と見えて、一身の始終ただ詩と楽とに有り。又詩を論じ玉ふには、詩可以興可以観可以羣可以怨近之事父遠之事君と見えて、人倫の道ここにもるる事なし。されば小子何莫学夫詩とも、女学周南召南矣乎ともの玉ひし。聖人の教誡勧懲これに過ぐべからず。然るを宋儒の見よりなどおもひしは、いと頑なる心なるべし。

と述べてゐるのである。文中に引かれた漢文は悉く孔子の言葉として「論語」に見えるものであるが、それらの言葉を挙げて「一身の始終ただ詩と楽とに有り」、「人倫の道ここにもるる事なし」といふのは、それぞれ「論語集註」の朱子の言に拠った思想であらう。殊に後者は「詩可以興、云々」(陽貨)の朱子の註にある「人倫之道。詩無不備」の意をそのまま述べたものと見ることができる。「聖人の教誡勧懲これに過ぐべからず」といふのが朱子学派の思想であることは改めて論ずるまでもない。

註、鈴木虎雄氏著「支那詩論史」第一篇第三章参照。

五

宗武が歌の道は勧善懲悪の教へとする所であると述べたのは、右の如く朱子の詩教の感化を受けた見解であるが、宗武は「詩経」の精神を尊んで、「臆説剰言」では、

詩経とても皆理りをいひたるのみにはあらず。葛覃の篇の如きは只事をのべたるなり。されば此の国の歌のよしあし定めんも詩経の心にたがふべからず。さて教へとすべき歌は、安らかなる歌か、或は理りをふくみ、あるはおのづから事をのべて、わづかだに理りに違はざるなどの歌なり。またそれらの体に似てかへりて人の心にわざはひ有るべきもあり。

と論じて、十余首の古歌を朱子の説く「詩経」の精神に則って批判してゐるのである。

例へば万葉集にある、

君が代もわがよも知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな

は、天智帝皇子の時(万葉集には中皇命とある)紀伊の温泉に行かれた折の歌で、公事でもないのに「君が代も」と始めに出されたのは、忠義の御心が深く思はれると述べ、同じく人麿の、

見れどあかぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む

は、吉野の景を賞し君を祝し奉るやうに聞えるが、よく案ずると、人が常に遠く遊ぶのはよからぬことで、まして人君がかく数多度に行幸あれば、民は疲弊するであらう、吉野の景を見飽くまで行幸なさったならば、民は愈よ困るであらう、すべて物事には程があるべきだといふ意を含んでゐると論じ、これらの歌は「いとゆうにあれど、理り深くぞきこゆる」と評してゐる。「春過ぎて夏きたるらし」、「田子の浦ゆ打ち出でて見れば」、「箱根路を我こえ來れば」などの歌は特に教誡とはならぬが、自然の景を叙べて人の心を和らげ

つゆほども理りに違ふ事がなくて、「詩経」の葛覃の篇にも異ならないやう思はれると述べてゐる。また万葉の、

苦しくもふり來る雨かみわが崎狭野のわたりに家もあらなくに

といふ歌は、「宸居のふかくまします中にも、遠の里人の哀をしろしめさるべき便ともなる」歌であるのに対し、定家の「駒とめて袖うちはらふ」と詠んだのは、さる苦しみを知る人にも面白く感ぜられて、佐野のわたりの雪景色を見ることを羨しと思召し、民を憐み給ふ御心も弛むであらうと論じて、却ってわざはひとなるべき歌であると評してゐるのである。

「詩経」の葛覃の詩は小序に「后妃之本也」とあり、毛伝にはこれを「興也」としてゐるが、朱子は「詩集伝」巻一で「后妃之本也」といふ説は肯定しながら、この詩を「賦也」といひ、「賦者。敷二陳其事。而直言レ之者也」と註している。宗武が葛覃の詩は理りを言ったのではなく、ただ事を述べたものであるとしてゐるのは、朱子の解釈に従った考へ方であり、それに拠って彼は「春過ぎて」、「田子の浦ゆ」などの教誡の意味を持ってをらない叙景歌を、理りに違はぬものとして是認したのであった。和歌の善悪を定めるのに「詩経」の心にたがふべからずといってゐるのを見れば、「君が代も」、「見れどあかぬ」などの歌に理りを認めて、「駒とめて」の歌にわざはひとなるべき所があると考へたのも、要するに、詩に教誡勧懲の用があるとする朱子の詩教に基づく思想から、和歌の善悪を批判したものであると言ひ得るであらう。朱子はまた「詩集伝」の序で詩を学んで知行の工夫に用ひた場合の効用を、「修レ身及レ家。平二均天下一之道。其亦不レ待二他求一。而得二之於此一矣」と述べてゐる。宗武はこれに準じて和歌の効用を考へ、その立場から古歌を評してゐるといふこともできるのである。

朱子が孔子の「鄭聲淫」といった鄭声は即ち詩の鄭風であるとして、「禮記」楽記に「鄭衛之音。亂世之音也」、「桑間濮上之音。亡國之音也」といふ鄭衛の音や桑間濮上の音を詩の詞の上に求めたことは、すでに前稿に述べた所である(註一)。また宗武が「歌論」において、楽の中で最も直接に人心に感化を与へるのは歌の詞であるとして、在満の批評を反駁したことも、かつて述べた通りである(註二)。詩なり歌なりの詞を重んずるといふ点は、やはり両者の間に思想的な関聯があるのではないかと思はれる。朱子は「詩集伝」巻一で、関雎の詩について、「論語」八佾にある「関雎楽而不レ淫。哀而不レ傷」という孔子の言葉を挙げて、「愚謂此言。爲二此詩一者。得二其性情正。聲気之和一也」と言ひ、

獨其聲気之和。有二不レ可二得而聞一者。雖レ若レ可レ恨。然學者如即二其詞一。而玩二其理一。以養レ心焉。則亦可二以得二學レ詩之本一矣。

と述べてゐる。宗武が「歌はあらはに理りを述ぶるなれば」(歌論)と言って、聖人ならぬ人の作った歌も、聖人の詞に基づいて作ったのは、その理りが聖人の詞に違ふ筈はないのに対し、楽曲の場合は、たとひ聖人の作を基にしても、常人の作は聖人の作と一致するか否かは決し難いと論じて、あくまでも歌の詞の理りを重要視してゐるのは、朱子の思想の影響を受けた所があるものと考へられるのである。

「余言」の歌をまなぶの論には、「論語」子張篇にある「雖二小道一。必有二可レ観者一焉。致レ遠恐レ泥。是以君子不レ爲也」といふ子夏の言葉によって、歌学の価値を論じた文がある。

これは医道などにも理りはこもりたれども、その事を切にすれ

ば、流れて大道に疎かなるべきを誡めたまふ御言なるべし。まして今の歌学などいふもの、くすしの道究めたらんほども益あるべからず。それをひたぶるに求めんは、かの聖の教へに戻るべきにや。

と述べてゐるのである。宗武は歌は性情を和らげ風紀を助けるものとして尊重したが、歌学は小道の類であると見なし、「論語」の言葉に基づいて、歌学を一途に学ばうとするのは、聖人の教へに背くものであると論じたのであった。これは言ふまでもなく、儒教の思想に立って、歌学の医学に及ばないことを述べたものである。然し宗武が歌学を医学に比した所には、朱子からの影響を考へなければならないであらう。「論語集註」では、右の子夏の言葉に見える小道の意味を、「如二農圃醫卜之屬一」と註してゐる。仁斎は「論語古義」で「如二諸子百家之屬一是也」と註してゐて、この解釈は何晏や皇侃の説に従ったものと思はれる。徂徠は「論語徴」で、朱子の説を認めまた仁斎の説をも否定せず、「雖二佛老一。必有二可レ観者一焉」と記してゐる。宗武が医道を小道の例に挙げたのは、朱子の註に拠ったものと見るべきであって、宗武の歌論における朱子学の影響はこのやうな問題にまで及んでゐるのである。

註一、拙稿「在満の歌論に於ける堀川学の影響」（語文・十三輯）

註二、拙稿「田安宗武氏の歌論について」（樟蔭文学・第六号）。

――大阪大学教授――